

大極殿院の設計・計画 ・思想

はじめに 大極殿院は古代の宮殿の中枢部にあたり、大極殿とその前庭を回廊が取り囲んで区画し、北面回廊が後殿につながる場合や後殿をも取り囲む場合がある。現代と同様に造営に当たっては、当時も基本構想あるいは基本計画と、それを実施するための設計があり、構想から実施に至るまで詳細な検討が加えられたものと考えられる。大極殿院の東西および南北規模、すなわち向かい合う回廊の心々距離は半端な寸法もみられ、それについて合理的説明はない。そこで、施工実態を示しうる検出遺構から設計寸法を推定し、大区画は完数値をとるといような現代的先入観を排除した上で、当時重要視された思想や学問等を参考に基本計画における寸法や構想における思想を検討した。

各大極殿院の規模と解釈 各大極殿院の図に報文における東西および南北規模を加筆し、右に各建物の実施段階での設計の寸法と解せる柱間寸法の総長を示した。その下にはある数字の倍数で示しうる大極殿院規模の計画寸法を推定し、併記した。

大極殿院は宮城中心部に割り当てられた大区画の中に、ある数値の倍数を用い、整数比で表せる規模の区画で計画される。しかし、回廊規模は各建物桁行柱間寸法や直交する回廊の梁間寸法で既定されるため、門や後殿との取り付きで回廊柱間寸法の調整が必要になる。ところが、回廊の途中に門や後殿を含まない場合は調整ができず、計画寸法をつくることはできない。この計画に用いられる数値9、40、19、26は陰陽五行説や律曆志などに散見する古代の聖数である。

藤原宮の9は、天文遁甲を能くしたと記される天武天皇に関わる。天武の命日は朱鳥元年九月九日。重九は長

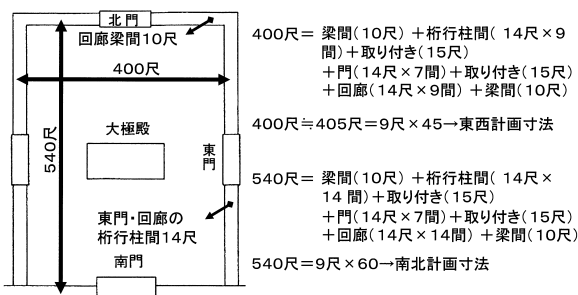


図48 藤原宮大極殿院

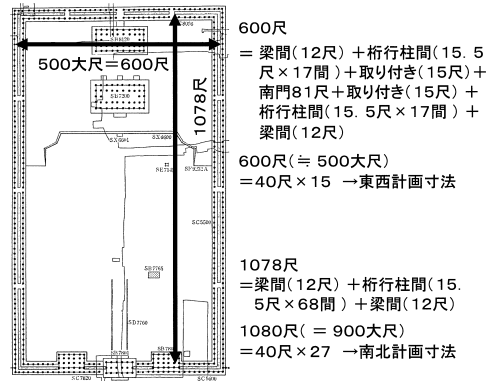


図49 平城宮第一次大極殿院(恭仁遷都前)

久に通音する。9は陽数の極数で、それを掛け合わせた81とともに道教では神聖数として尊重された。また、東西：南北が3：4の計画は3：4：5の直角三角形と関わる。数学書『周髀』では、三平方の定理を証明した上で、夏至や冬至などにおける太陽高度の測定から大地の広さや宇宙構造論を説く。

平城宮第一次大極殿院の東西：南北は5：9であり、紫禁城の太和殿等が載る三重の大基壇のそれと同じであり、『易』の注釈書には「王者居九五富貴之位」とある。9、5、3の組み合わせは王都と宇宙との関係を示すシンボルもいう。40は中国的な方向感の5と、「天ツ日嗣高御座に坐して天地八方を治める」日本的な方向感の8の乗数でもあり、天皇が支配する方向と関わる。

19は難波宮・平城宮第二次、26は長岡宮の各大極殿院で用いられた数字で、旧四分曆の十九年七閏法に関連する。一年を365と1/4日とし、19太陽年が235朔望月とほぼ一致するため、19年の間に7閏月を入れる太陰太陽曆である。この19と、7を加えた26は術数として認識されていたと江口泷氏は指摘する。

これらの数字と各大極殿院計画規模の比に用いられた整数は竣工予定年等の年回り(六十干支)と関わり、時空の調和を図るのではなからうか。

宇宙を象る宮室 秦の始皇帝の時には、宮室は天極、宇宙を象って作る考えが既に存在した。曹魏洛陽城では「上天の太極に法って」太極殿を建設し、宮城の配置が天の星象配置に擬せられた。さらに、梁の太極殿に関しては『徐孝穆集』「太極殿銘序」に「星象に法って王位の尊嚴を増し」「日月星辰と輝きを等しくして宇宙に顕示し、万国の諸侯を朝会せしめる」とある。太極は太一と同じで、万物・宇宙の根源を意味し、太一は天文占星的思想においては天の中心をなす紫微宮に含まれる天帝の常居であって、宇宙の至尊なるものと考えられており、これを地上に顕出しようとしたものが太極殿とされる。日本の大極殿もこうした思想を受容したものと思われる。

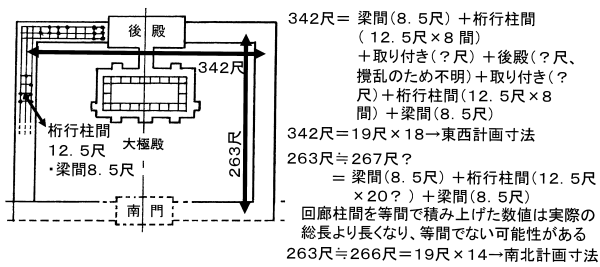


図50 後期難波宮大極殿院

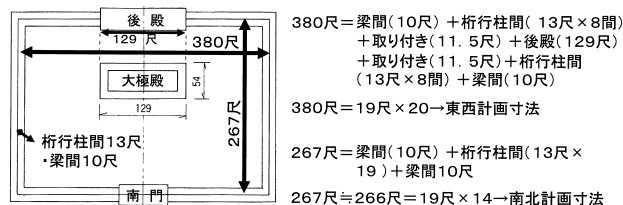


図51 平城宮第二次大極殿院

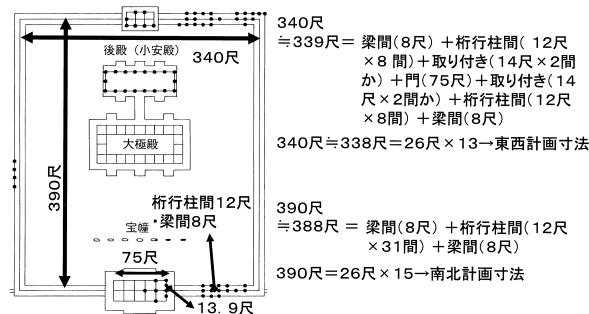


図52 長岡宮大極殿院

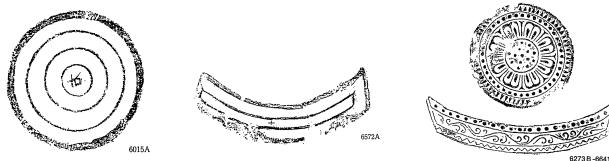


図53 大極殿院出土瓦(難波宮、藤原宮)

大極殿院出土瓦 難波宮大極殿院では、重圏文軒丸瓦で第一圏内に「右」正字・裏字陽文のあるものや重圏文軒平瓦で瓦当中央付近に十字の陽文のあるものが出土している。櫻井久之氏は三重の圏線直径とキトラ古墳の天文図の内規・赤道・外規の推定半径を詳細に比較検討し、三円は天文図のそれを意図したものとみており、筆者も同感である。しかし、「右」字の意味は不明とする。

『周髀算經』の宇宙論は、天は傘のようで地は碁盤のようとする蓋天説をとる。漢代以降は、日月五星(七曜)が天球上を右(東)へ動いている天体現象を、天は左(西)へ廻っている^{ひきうす}碁、日月五星はその上を右へ這う蟻に喩え、^{けいわく}熒惑(火星)の逆行現象は不祥とした。右裏字は透明な天球(天蓋)に内側から記した右の字を天球の外側からみたデザインである。天球の外側からの視点があったことは、後漢墳墓武梁祠の画像石や北朝鮮の支石墓の天井石等に北斗七星が裏側に描かれていることから知られる。渾天儀(天体観測機器)の発明は専門官人にその視覚体験を容易にした。右裏字は、七曜の右への順行を願って天球に描いた右の字を、天帝が観て了承を下した嘉応で、天皇の徳が及ぶ天下の安泰を示すと考える。正字も同様であろう。十字陽文は、軒丸瓦の中心を外している意味(歳差による天の北極の移動を考慮)において北極星と考えることも不可能ではないが、偏心円で表される黄道の中心の象徴であり、それを記す重圏文軒平瓦は同心三円を省略変形させたものと考えたい。

蓮華文は宇宙の象徴、宮殿は宇宙を象ると考えられていたために、寺院だけでなく宮殿の軒先も飾る。藤原宮大極殿院の軒丸瓦は中房に蓮子15、弁の外側に珠文40を配す。『五行大義』では15は1~5の生数の和、40は6~10の成数の和とし、55は天地創造の数とされる。中房の蓮子1+5+9は、中心から均等に分割しただけでは配置しにくい。数字に意味を考える視点が必要であろう。

この軒丸瓦と組む軒平瓦は嘗て天星地水といわれたが、上外区の点は星、下外区の鋸歯は地を、唐草文は地上(風と水か)、すなわち、天地人を表現したと考えられよう。『易』繫辞上傳には「易は天地を準う...仰いでもって天文を觀、俯してもって地理を察す」とある。大極殿院と陰陽寮 平城宮第一次大極殿前庭にある磚積擁壁の不可解な平面形は同心3円(40尺×6、7、8)と1偏心円(40尺×9)の交点をういたデザインであり、キトラ古墳天文図のような宇宙の構造を思わせる。大極殿院は宇宙を象り、高御座を同心3円の中心に置く。また、偏心円(黄道)を外規より大きくしたのは日神天照大神の子孫たる天皇が宇宙を支配することを示したと解せる。前者は天命思想、後者は皇孫思想の表現と思われる。

上述の遺構状況や出土遺物から大極殿院の計画技術者は、天文や暦、易に関わる知識を持つことが知られる。正史の天平宝字元年十一月九日条に学生の学ぶべき典籍として「天文生は天官書・漢晋天文志・三色簿讀・韓楊要集。陰陽生は周易・新撰陰陽書・黄帝金匱・五行大義。曆算生は漢晋律曆志、大衍曆議、九章、六章、周髀、定天論。」とあり、小論で言及した典籍を含む。彼らの上に立つ陰陽師が藤原、平城、長岡の占地に関わったことは正史に明らかである。陰陽寮がその中心区画大極殿院の構想・計画に関わり、数値や軒瓦の意匠の意味などは秘匿したまま造宮官司が設計・施工したと思われる。なお、大宝元年八月二日に勅命で還俗した3人の僧が「官人考試帳」で陰陽師になったことが知られるが、彼らが第一次大極殿院に関わったのであろう。(内田和伸) 参考文献 江口泷『古代天皇と陰陽寮の思想』河出書房新社、1999。櫻井久之「重圏文軒瓦の意匠について」『続文化財学論集』続文化財学論集刊行会、2003。竹澤勉『新益京と四大神』大和書房、1990。拙稿「平城宮第一次大極殿院前庭のデザインとその思想」『ランドスケープ研究』66-5、2003。拙稿「大極殿院の規模とその思想・計画・設計に関する一考察」『ランドスケープ研究』67-5、2004。